資料6

健感発１００４第１号
平成２３年１０月４日

各都道府県衛生主管部（局）長殿

厚生労働省健康局結核感染症課長

ポリオワクチンの接種に関する広報について（依頼）

日頃より、予防接種行政につきまして、ご理解ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

厚生労働省では、不活化ポリオワクチンの導入に向けた取り組みを進めていますが、導入までには一定の時間を要することから、ポリオワクチン接種を待つ方が増えるとポリオに対する免疫を持たない人が増え、国内でポリオの流行が起こってしまう危険性があります。

このため、厚生労働省において、別添のとおり普及啓発用のリーフレットと、ポリオに関する Q&A を作成いたしましたので、ご活用いただき、貴管下市町村等を通じて、住民の皆様への正確な情報提供に努めていただくようお願い申し上げます。

なお、今般、厚生労働省のホームページに、予防接種とポリオのホームページを新たに作成いたしました。今後、随時更新を行い、情報提供を行っていくこととしていますので、あわせてご活用ください。

厚生労働省ホームページ

予防接種情報のホームページ

http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou20/index.html

ポリオワクチンのホームページ

http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/polio/index.html

保護者の皆様へ

ポリオの予防には、ポリオワクチンの接種が必要です。

不活化ポリオワクチンの導入は、可能な限り迅速に行いますが、**早くても、2012(平成24)年度の終わり頃**の予定です。

◆不活化ポリオワクチンは、今年末頃から順次、国内導入のための申請（薬事承認申請）が、開発企業によって行われる予定です。

◆不活化ポリオワクチンの国内導入は、可能な限り迅速に行いますが、早くても、2012（平成24）年度の終わり頃になる予定です。

不活化ポリオワクチンの導入まで、ポリオワクチンの接種を**待つことは、おすすめできません**。

◆ポリオの流行のない社会を保つためには、ワクチンの接種が必要です。

◆不活化ポリオワクチンを導入するまで、ポリオワクチンを接種せずに様子をみる人が増えると、免疫をもたない人が増え、国内でポリオの流行が起こってしまう危険性があります。

○たとえば、2011（平成23）年の秋に生後６か月の乳児が、2012（平成24）年度末までワクチンの接種を受けずにいると、２歳になるまでずっと、ポリオに対して免疫のない状態になってしまいます。

ポリオワクチンを接種することが、**ポリオを予防する唯一の方法**です。

◆日本では、2000年にポリオの根絶を報告しましたが、世界には、今でも流行している地域があり、渡航者などを介して感染はどの国にも広がる可能性があります。

○パキスタン、アフガニスタンなどの南西アジア、ナイジェリアなどのアフリカ諸国では、今でも流行がみられます。

○いったんポリオが根絶された中国やタジキスタンなどでも、最近流行が起こったことが報告されています。

◆このため、ポリオの根絶に向けて、世界中でワクチンの接種が行われています。

○きちんとワクチンを接種し、ほとんどの人が免疫をもてば、海外でポリオが流行しても、国内での流行を防ぐことができます。

厚生労働省

ポリオの予防には、ポリオワクチンの接種が必要です。

できるだけ早く、不活化ポリオワクチンへ切り替えられるよう取り組んでいます。

◆生ポリオワクチンには、ごくまれにですが、接種の後、手足などに麻痺（まひ）を起こす場合があることが知られています。

○「生ワクチン」はウイルスの病原性を弱めてつくったワクチン、「不活化ワクチン」はウイルスを不活化して（＝殺して）つくったワクチンです。

○麻痺を起こした事例は、最近では

・生ワクチンを接種した人では、10年間で15例（100万人の接種当たり約1.4人に相当）

・周囲の人では、５年間で１例（いわゆる「２次感染」）

が認定されています。

◆現在、複数の企業によって不活化ポリオワクチンの開発が進められており、実際に人に接種して安全性や有効性を確認する「治験（ちけん）」が行われています。

○ジフテリア・百日せき・破傷風・不活化ポリオの４種を混合したワクチン（DPT-IPV）や不活化ポリオ単独のワクチンの治験などが進んでいます。

◆厚生労働省では、不活化ポリオワクチンを国内に導入する際には、できるだけ速やかに定期接種として広く実施できるよう、生ワクチンからの移行の方法などの検討を始めています。

生ポリオワクチンの接種を受けた後は、手洗いなどに気をつけましょう。

◆生ポリオワクチンを接種してから１か月程度は、ウイルスが便の中に出ています。

○特に初回接種の後１～２週間目に、便中のウイルス量が最大になるという報告もあります。

◆この期間、おむつ交換の後などには十分に手を洗うなどして、便の中のウイルスが他の人の口に入らないように気をつけ、感染の危険性を少しでも小さくしましょう。

◆また、生ポリオワクチンの２次感染を防ぐには、地域内のすべての乳児が一斉に接種を受けるのが、最も安全性の高い方法です。お住まいの市町村がご案内する時期に接種を受けることをおすすめします。

ポリオワクチンに関する情報は、厚生労働省ホームページでご案内しています。

▼

http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/polio/index.html

厚生労働省

ポリオワクチンに関するQ&A

平成23年10月4日版

問1. ポリオってどんな病気ですか？

問2. 生ポリオワクチンと不活化ワクチンはどう違うのですか？

問3. 生ポリオワクチンによる麻痺はどのくらい発生しているのですか？

問4. ポリオワクチンを接種していないと、ワクチンを接種した子から感染してポリオになることがあると聞きました。どうすればよいのでしょうか。

問5. 日本ではもうポリオは発生していないのに、ポリオワクチンの接種が必要なのですか？

問6. 不活化ポリオワクチンに切り替わるのはいつ頃ですか？

問7. 不活化ワクチンに切り替わるまでの間、接種しないで待っていたほうがよいのですか？

問1. ポリオってどんな病気ですか？

・ポリオは、人から人へ感染します。

ポリオは、ポリオウイルスが人の口の中に入って、腸の中で増えることで感染します。増えたポリオウイルスは、再び便の中に排泄され、この便を介してさらに他の人に感染します。成人が感染することもありますが、乳幼児がかかることが多い病気です。

・ポリオウイルスに感染すると手や足に麻痺があらわれることがあります。

ポリオウイルスに感染しても、多くの場合、病気としての明らかな症状はあらわれずに、知らない間に免疫ができます。

しかし、腸管に入ったウイルスが脊髄の一部に入り込み、主に手や足に麻痺があらわれ、その麻痺が一生残ってしまうことがあります。

麻痺の進行を止めたり、麻痺を回復させるための治療が試みられてきましたが、現在、残念ながら特効薬などの確実な治療法はありません。麻痺に対しては、残された機能を最大限に活用するためのリハビリテーションが行われます。

問2. 生ポリオワクチンと不活化ポリオワクチンはどう違うのですか？

・生ポリオワクチンには、病原性を弱めたウイルスが入っています。

「生ワクチン」は、ポリオウイルスの病原性を弱めてつくったものです。ポリオにかかったときとほぼ同様の仕組みで強い免疫ができます。免疫をつける力が優れている一方で、まれにポリオにかかったときと同じ症状が出ることがあります（問3参照）。 その他、麻しん（はしか）、風しん（三日ばしか）のワクチン、結核のBCGが生ワクチンです。

・不活化ワクチンは、不活化した（殺した）ウイルスからつくられています。

「不活化ワクチン」は、ポリオウイルスを不活化し（＝殺し）、免疫をつくるのに必要な成分を取り出して病原性を無くしてつくったものです。ウイルスとしての働きはないので、ポリオと同様の症状が出るという副反応はありません（ただし、発熱など、不活化ワクチンにも副反応はあります）。その他、百日せき、日本脳炎のワクチンが不活化ワクチンです。

問3. 生ポリオワクチンによる麻痺はどのくらい発生しているのですか？

・ポリオの予防接種を受けた人の中には、ポリオにかかった時と同じような麻痺を生じることがあります。

現在、日本国内で（公費での）予防接種に使っているワクチンは生ポリオワクチンです。入っているウイルスは病原性を弱めているとはいえ生きていますから、ウイルスが変化するなど何らかの要因で、ポリオにかかった時と同じように、手や足に麻痺があらわれることがまれにあります。

・ポリオの予防接種を受けた人の中で、ポリオによる麻痺の可能性があると認定されたのは、最近の 10 年間では 15 人（100 万人への接種当たり約1.4人）です。

ポリオの予防接種を受けた人の中で、予防接種健康被害救済制度に申請し、ポリオによる麻痺と認定された人数は、2001（平成 13）年度～2010（平成 22）年度の 10 年間で、15 人です。日本では、1 年に概ね 110 万人がポリオの予防接種を受けていることから、100 万人の接種当たり約1．4人に相当します。

問4. ポリオワクチンを接種していないと、ワクチンを接種した子から感染してポリオになることがあると聞きました。どうすればよいのでしょうか。

・極めてまれですが、生ワクチンの接種を受けた人の周囲の人が、ポリオになることがあります。

予防接種を受けた人と接触した人の中にも、ポリオと同じ様な麻痺などの症状があらわれることがあります。これは、生ポリオワクチンに含まれるウイルスが予防接種を受けた人の便の中に出て、周囲の人に感染したことによるものです。このような2次感染は、2006(平成 18)年度～2010(平成 22)年度の間に日本全国で1人の報告がありました。ポリオの予防接種を受けていないご家族など、ポリオウイルスに対する免疫を持っていない人は、ウイルスに感染する可能性が高く、麻痺の症状が現れる可能性がより高いと考えられます。

・生ワクチンの予防接種を受けて1カ月程度は、ウイルスが感染しないよう乳児の便の処理などに細心の注意を払いましょう。

予防接種を受けてから1カ月程度はウイルスが便の中に出ています。特に初回接種の後1～2 週間目に、便中のウイルス量は最大になるという報告もあります。この期間、おむつ交換の後などには十分に手を洗うなどして、便の中のウイルスが他の人の口に入らないように気をつけ、感染の危険を少しでも小さくすることをおすすめします。

また、生ポリオワクチンからの2次感染を防ぐには、地域内の全ての乳児が一斉に接種を受けるのが、最も安全性の高い方法です。お住まいの市町村がご案内する時期に接種を受けることをおすすめします。

問5. 日本ではもうポリオは発生していないのに、ポリオワクチンの接種が必要なのですか？

・予防接種によってポリオの大流行を防ぐことができました。

日本では、1960(昭和 35)年に、ポリオ患者の数が5千人を超え、かつてない大流行となりましたが、生ポリオワクチンの導入により、流行はおさまりました。1980(昭和 55)年の1例を最後に、現在まで、野生の(ワクチンによらない)ポリオウイルスによる新たな患者はありません。

・今でも、海外から、ポリオウイルスが国内に入ってくる可能性があります。

海外では依然としてポリオが流行している地域があります。パキスタンやアフガニスタンなどの南西アジア、ナイジェリアなどのアフリカ諸国です。また、これらの国の患者からの感染により、タジキスタン、中国など他の国でも発生したという報告があります。

ポリオウイルスに感染しても、麻痺などの症状が出ない場合が多いので、海外で感染したことに気がつかないまま帰国(あるいは入国)してしまう可能性があります。症状がなくても、感染した人の便にはポリオウイルスが排泄され、感染のもととなる可能性があります。

・ポリオに対する免疫をもつ人の割合が減ると、流行する危険があります。

仮に、ポリオウイルスが日本国内に持ち込まれても、現在では、ほとんどの人が免疫を持っているので、大きな流行になることはないと考えられます。シンガポール、オーストラリアなど、予防接種率が高い国々では、ポリオの流行地からポリオ患者が入国しても、国内でのウイルスの広がりがなかったことが報告されています。しかし、予防接種を受けない人が増え、免疫をもつ人の割合が減ると、持ち込まれたポリオウイルスは免疫のない人からない人へと感染し、ポリオの流行が起こる可能性が増加します。

問6. 不活化ポリオワクチンに切り替わるのはいつ頃ですか？

・全てが順調に進んだ場合でも、不活化ポリオワクチンの導入は、早くても2012(平成24)年度の終わり頃になる予定です。

ジフテリア・百日せき・破傷風・不活化ポリオの4種混合ワクチン(DTP-IPV)は、国内で開発が進められていて、今年末頃から順次、各メーカーからの薬事承認のための申請が行われる予定です。全ての手続きが順調にいった場合でも、国内での導入は早くても2012(平成24)年度中になる予定です。また、DPT－IPVの導入から近い時期を目指して、単独の不活化ポリオワクチンの導入も進められています。

・厚生労働省では、不活化ポリオワクチンへ円滑に移行するための準備にとりかかっています。

不活化ポリオワクチンが国内で導入された場合には、できるだけ速やかに、予防接種法に基づく定期接種として実施したいと考えています。生ワクチンから不活化ポリオワクチンに円滑に移行できるよう、厚生労働省では、今年8月に「不活化ポリオワクチンへの円滑な移行に関する検討会」を設置し、移行の方法などの検討を始めています。

問7. 不活化ワクチンに切り替わるまでの間、接種しないで待っていたほうがよいのですか？

・今でも、海外からポリオウイルスが国内に入ってくる可能性があります。

海外では依然としてポリオが流行している地域があります。パキスタンやアフガニスタンなどの南西アジア、ナイジェリアなどのアフリカ諸国です。また、これらの国の患者からの感染により、タジキスタン、中国など他の国でも発生したという報告があります。

ポリオウイルスに感染しても、麻痺などの症状が出ない場合が多いので、海外で感染しても感染したことに気がつかないまま帰国（あるいは入国）してしまう可能性があります。症状がなくても、感染した人の便にはポリオウイルスが排泄されて、感染のもととなる可能性があります。

・不活化ポリオワクチンの導入まで、ポリオワクチンの接種を待つことはおすすめできません。

不活化ポリオワクチンが導入されるまで、ポリオワクチンを接種せずに様子をみる人が増えると、免疫をもたない人が増え、国内でポリオの流行が起こってしまう可能性が増加します。ポリオ流行のない社会を保つためには、ワクチンの接種が必要です。

生ポリオワクチンの2次感染を防ぐには、地域内で全ての乳児が一斉に接種を受けるのが、最も安全性の高い方法です。お住まいの市町村がご案内する時期に接種を受けることをおすすめします。

ポリオ生ワクチンの接種者数の推移
（平成21年度から平成23年度（4月～6月分））

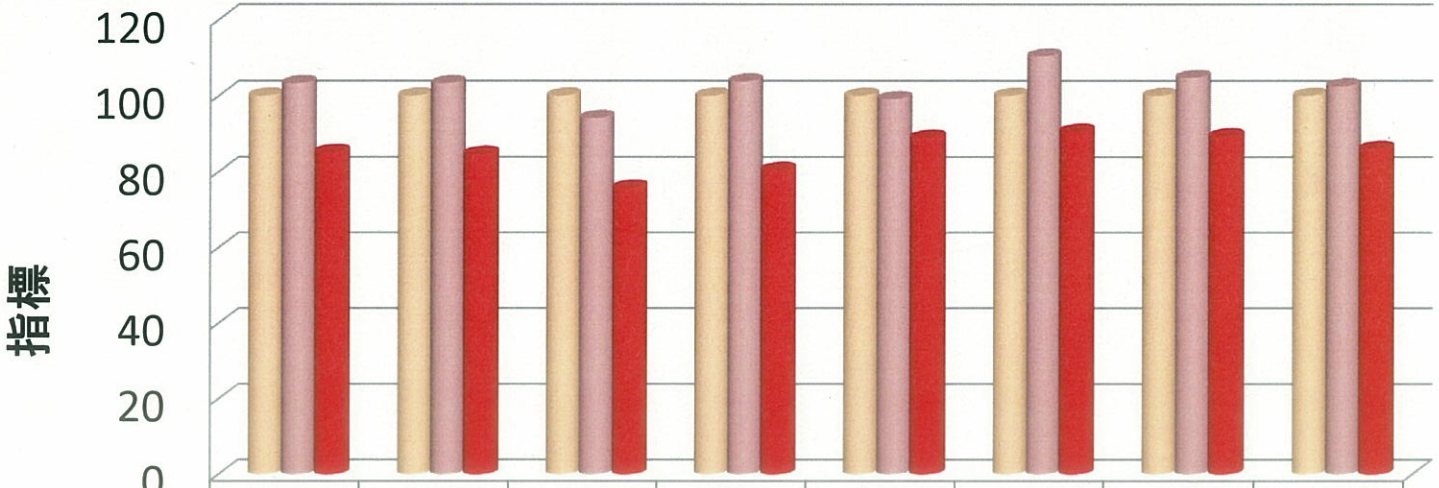
●平成21年度から平成23年度の4月～6月の接種者数を調査し、平成22年度及び平成23年度の接種者数の対前年度比を示す（平成21年度から平成23年度の接種者数をすべて回答した市区町村のみを集計。有効回答数：1，743市区町村のうち、1，607市区町村。）

	平成22年4月～6月 （対前年度比）	平成23年4月～6月 （対前年度比）
全国平均	＋3．2%	－17．5%

【地域別】	平成22年4月～6月	平成23年4月～6月
北海道	＋3．2%	－18．0%
東北（青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島）	－5．9%	－19．6%
関東（茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川）	＋3．7%	－22．4%
中部（新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知）	－0．9%	－10．2%
近畿（三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山）	＋10．3%	－18．0%
中国四国（鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知）	＋4．7%	－14．7%
九州（福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄）	＋2．5%	－16．1%

（参考） ※厚生労働省人口動態調査による出生数	平成21年生まれ 1，070千人 （対前年度比　98．1%）	平成22年生まれ 1，071千人 （対前年度比　100．1%）

ポリオ生ワクチンの接種者数の推移
（平成21年度から平成23年度（4月～6月分））

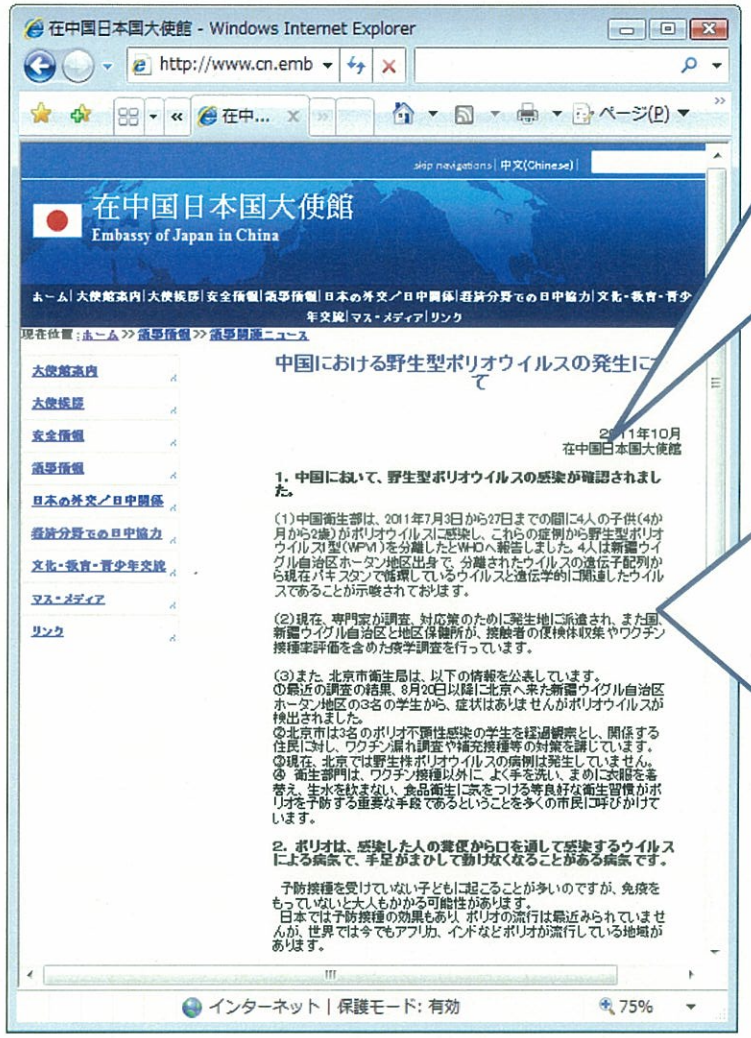


	全国平均	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国四国	九州
平成21年4月～6月	100	100	100	100	100	100	100	100
平成22年4月～6月	103.2	103.2	94.1	103.7	99.1	110.3	104.7	102.5
平成23年4月～6月	85.1	84.6	75.7	80.4	88.9	90.5	89.3	86.0

●平成21年4月～6月の接種者数を100とする（有効回答数：1，607市区町村）

注）東北：青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島
関東：茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川
中部：新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知
近畿：三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山
中国四国：鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知
九州：福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄

中国における野生株ポリオの感染について



1. 中国において、野生型ポリオウイルスの感染が確認されました。

(1)中国衛生部は、2011年7月3日から27日までの間に4人の子供(4か月から2歳)がポリオウイルスに感染し、これらの症例から野生型ポリオウイルス1型(WPV1)を分離したとWHOへ報告しました。4人は新疆ウイグル自治区ホータン地区出身で、分離されたウイルスの遺伝子配列から現在パキスタンで循環しているウイルスと遺伝学的に関連したウイルスであることが示唆されております。

(3)また、北京市衛生局は、以下の情報を公表しています。

①最近の調査の結果、8月20日以降に北京へ来た新疆ウイグル自治区ホータン地区の3名の学生から、症状はありませんがポリオウイルスが検出されました。

②北京市は3名のポリオ不顕性感染の学生を経過観察とし、関係する住民に対し、ワクチン漏れ調査や補充接種等の対策を講じています。

③現在、北京では野生株ポリオウイルスの病例は発生していません。

④ 衛生部門は、ワクチン接種以外に、よく手を洗い、まめに衣服を着替え、生水を飲まない、食品衛生に気をつける等良好な衛生習慣がポリオを予防する重要な手段であるということを多くの市民に呼びかけています。

不活化ポリオワクチンの副反応について①

（例）
不活化ポリオワクチンIPOL（サノフィ社製）の添付文書（米国）

◆局所の反応
・紅斑 3.2%　・硬結 1%　・疼痛 13%　（48時間以内）

◆全身の反応　（DTP（ジフテリア、破傷風、百日せきの混合ワクチン）との同時接種後の報告を含む）
・39℃以上の発熱　38%
・易刺激性、眠気、泣き、fussiness（不機嫌）
・接種後の死亡例の報告がある（因果関係は不明）

◆消化器系
・食欲不振、嘔吐

◆神経系
・他社のワクチンで、ギランバレー症候群の報告がある（因果関係は不明）

※このほか、米国以外の同社製不活化ポリオワクチンの添付文書では、希な副反応として、アナフィラキシーショック等のアレルギー反応や、けいれん、頭痛等についても記載されている場合がある。
※IMOVAX POLIO とIPOLはいずれもサノフィ社製の不活化ポリオワクチンであり、国によって商品名等が異なっている。

不活化ポリオワクチンの副反応について②

●米国VAERS（副反応報告制度）による IPVを含むワクチンによる重篤な副反応の報告数

（※接種後の副反応の報告を全て集計したものであり、因果関係の評価は行われていない）

◆2010年の報告の集計　（2010年のすべてのワクチンの副反応報告数は31,657例）

	DTP-IPV-HepB-HIB	DTP-IPV	DTP-IPV-HIB	IPV	計
死亡			27	4	31
障害		1	5	7	13
入院	3	23	124	45	195

DTP：ジフテリア、破傷風、百日せきの混合ワクチン　IPV：不活化ポリオワクチン
HepB：B型肝炎ワクチン　HIB：ヒブワクチン

◆1990～2010年に9件の急性散在性脳脊髄炎（ADEM）の報告があった

（出典）米国VAERS（vaccine adverse events reporting system; 副反応報告制度）データベースより集計　http://vaers.hhs.gov/data/data